南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

blueskybook

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録::秋月 種樹::ブルースカイブックス

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

秋月 種樹

一　勿下認二游惰一以爲中寛裕上。勿下認二嚴刻一以爲中直諒上。勿下認二私欲一以爲中志願上。

〔譯〕游惰（いうだ）を認（みと）めて以て寛裕（かんゆう）と爲すこと勿（なか）れ。嚴刻（げんこく）を認めて以て直諒（ちよくりやう）と爲すこと勿れ。私欲（しよく）を認めて以て志願（しぐわん）と爲すこと勿れ。

二　毀譽得喪、眞是人生之雲霧、使二人昏迷一。一二掃此雲霧一、則天青日白。

〔譯〕毀譽（きよ）得喪（とくさう）は、眞（しん）に是れ人生の雲霧（うんむ）、人をして昏迷（こんめい）せしむ。此の雲霧を一掃（さう）せば、則ち天（てん）青（あを）く日（ひ）白（しろ）し。

〔評〕徳川慶喜（よしのぶ）公は勤王（きんわう）の臣たり。幕吏（ばくり）の要する所となりて朝敵（てうてき）となる。猶南洲勤王の臣として終りを克（よ）くせざるごとし。公は罪（つみ）を宥（ゆる）し位に敍（じよ）せらる、南洲は永く反賊（はんぞく）の名を蒙（かうむ）る、悲しいかな。（原漢文、下同）

三　唐虞之治、只是情一字。極而言レ之、萬物一體、不レ外二於情之推一。

〔譯〕唐虞（たうぐ）の治（ち）は只是れ情の一字なり。極めて之を言へば、萬物一體も情の推（すゐ）に外ならず。

〔評〕南洲、官軍を帥ゐて京師を發す。婢（ひ）あり別れを惜みて伏水（ふしみ）に至る。兵士環（めぐ）つて之を視（み）る。南洲輿中より之を招き、其背を拊（う）つて曰ふ、好在（たつしや）なれと、金を懷中（くわいちゆう）より出して之に與へ、旁（かたは）ら人なき若し。兵士太（はなは）だ其の情を匿（かく）さざるに服す。幕府砲臺（はうだい）を神奈川に築（きづ）き、外人の來り觀るを許さず、木戸公役徒（えきと）に雑り、自ら畚（ふご）を荷（にな）うて之を觀る。茶店の老嫗（らうをう）あり、公の常人に非ざるを知り、善く之を遇す。公志を得るに及んで、厚く之に報ゆ。皆情の推（すゐ）なり。

四　凡作レ事、須レ要レ有二事レ天之心一。不レ要レ有二示レ人之念一。

〔譯〕凡そ事を作（な）すには、須（すべか）らく天に事（つか）ふるの心あるを要（えう）すべし。人に示すの念（ねん）あるを要せず。

五　憤一字、是進學機關。舜何人也、予何人也、方是憤。

〔譯〕憤（ふん）の一字、是れ進學（しんがく）の機關（きくわん）なり。舜（しゆん）何

人（なんぴと）ぞや、予（われ）何人ぞや、方（まさ）に是れ憤（ふん）。

六　著レ眼高、則見レ理不レ岐。

〔譯〕眼（がん）を著（つ）くること高ければ、則ち理（り）を見ること岐（き）せず。

〔評〕三條公は西三條、東久世諸公と長門に走る、之を七卿（きやう）脱走（だつさう）と謂ふ。幕府之を宰府（ざいふ）に竄（ざん）す。既にして七卿が勤王の士を募（つの）り國家を亂さんと欲するを憂へ、浪華（なには）に幽（いう）するの議（ぎ）あり。南洲等力（つと）めて之を拒ぎ、事終に熄（や）む。南洲人に語（かた）つて曰ふ、七卿中他日關白（くわんぱく）に任ぜらるゝ者は、必三條公ならんと、果して然りき。

七　性同而質異。質異、教之所二由設一也。性同、教之所二由立一也。

〔譯〕性（せい）は同じうして而て質（しつ）は異（ことな）る。質異るは教（をしへ）の由つて設（まう）けらるゝ所なり。性同じきは教の由つて立つ所なり。

八　喪レ己斯喪レ人。喪レ人斯喪レ物。

〔譯〕己（おのれ）を喪（うしな）へば斯（こゝ）に人を喪（うしな）ふ。人を喪へば斯に物（もの）を喪ふ。

九　士貴二獨立自信一矣。依レ熱附レ炎之念、不レ可レ起。

〔譯〕士（し）は獨立（どくりつ）自信（じしん）を貴（たふと）ぶ。熱（ねつ）に依（よ）り炎（えん）に附（つ）くの念（ねん）、起す可らず。

〔評〕慶應（けいおう）三年九月、山内容堂（ようだう）公は寺村左膳（さぜん）、後藤象（しやう）次郎を以て使となし、書を幕府に呈（てい）す。曰ふ、中古以還（くわん）、政刑（せいけい）武門に出づ。洋人來航するに及んで、物議（ぶつぎ）紛々（ふん／＼）、東攻西擊（げき）して、内訌（ないこう）嘗て※(「楫のつくり＋戈」、第3水準1-84-66)（をさま）る時なく、終に外國の輕侮（けいぶ）を招（まね）くに至る。此れ政令（せいれい）二途（と）に出で、天下耳目の屬（ぞく）する所を異にするが故なり。今や時勢一變（ぺん）して舊規（きうき）を墨守（ぼくしゆ）す可らず、宜しく政權（けん）を王室に還し、以て萬國竝立（へいりつ）の基礎（きそ）を建つべし。其れ則ち當今の急務（きふむ）にして、而て容堂の至願（しぐわん）なり。幕（ばく）下の賢（けん）なる、必之を察（さつ）するあらんと。他日幕府の政權を還（かへ）せる、其事實に公の呈書（ていしよ）に本（もと）づけり。當時幕府（ばくふ）既に衰（おとろ）へたりと雖、威權（ゐけん）未だ地に墜（お）ちず。公抗論（かうろん）して忌（い）まず、獨立の見ありと謂ふべし。

一〇　有二本然之眞己一、有二躯殼之假己一。須レ要二自認得一。

〔譯〕本然（ほんぜん）の眞己（しんこ）有り、躯殼（くかく）の假己（かこ）有り。須らく自ら認（みと）め得んことを要すべし。

〔評〕南洲胃（い）を病む。英醫偉利斯（いりす）之を診（しん）して、勞動（らうどう）を勸（すゝ）む。南洲是より山野に游獵（いうれふ）せり。人或は病なくして犬を牽（ひ）き兎を逐（お）ひ、自ら南洲を學ぶと謂ふ、疎（そ）なり。

一一　雲煙聚二於不一レ得レ已。風雨洩二於不一レ得レ已。雷霆震二於不一レ得レ已。斯可三以觀二至誠之作用一。

〔譯〕雲煙（うんえん）は已（や）むことを得ざるに聚（あつま）る。風雨（ふうう）は已むことを得ざるに洩（も）る。雷霆（らいてい）は已むことを得ざるに震（ふる）ふ。斯（こゝ）に以て至誠（しせい）の作用（さよう）を觀（み）る可し。

一二　動二於不レ得レ已之勢一、則動而不レ括。履二於不レ可レ枉之途一、則履而不レ危。

〔譯〕已むことを得ざるの勢（いきほひ）に動（うご）けば、則ち動いて括（くわつ）せず。枉（ま）ぐ可らざるの途（みち）を履（ふ）めば、則ち履んで危（あやふ）からず。

〔評〕官軍江戸を伐（う）つ、關西諸侯兵を出して之に從ふ。是より先き尾藩（びはん）宗家（そうけ）を援（たす）けんと欲する者ありて、私（ひそ）かに聲息（せいそく）を江戸に通（つう）ず。尾（び）公之を患（うれ）へ、田中不二麿（ふじまろ）、丹羽淳太郎等と議して、大義親（しん）を滅（ほろぼ）すの令を下す、實に已むことを得ざるの擧（きよ）に出づ。一藩の方向（はうかう）以て定れり。

一三　聖人如二強健無レ病人一。賢人如二攝生愼レ病人一。常人如二虛羸多レ病人一。

〔譯〕聖人は強健（きやうけん）病無き人の如し。賢人は攝生（せつしやう）病を愼（つゝし）む人の如し。常人は虛羸（きよるゐ）病多き人の如し。

一四　急迫敗レ事。寧耐成レ事。

〔譯〕急迫（きふはく）は事を敗（やぶ）る。寧耐（ねいたい）は事を成（な）す。

〔評〕大坂城陷（おちい）る。徳川慶喜（よしのぶ）公火船に乘りて江戸に歸り、諸侯を召して罪を俟（ま）つの状を告ぐ。余時に江戸に在り、特に別廳（べつちやう）に召（め）し告げて曰ふ。事此に至る、言ふ可きなし。汝將に京に入らんとすと聞（き）く、請ふ吾が爲めに恭順（きようじゆん）の意を致せと。余江戸を發して桑名に抵（いた）り、柳原前光（さきみつ）公軍を督（とく）して至るに遇ふ。余爲めに之を告ぐ。京師に至るに及んで、松平春嶽（しゆんがく）公を見て又之を告ぐ。慶喜公江戸城に在り、衆皆之に逼（せま）り、死を以て城を守らんことを請ふ。公聽（き）かず、水戸に赴く、近臣二三十名從ふ。衆奉じて以て主と爲すべきものなく、或は散（さん）じて四方に之（ゆ）き、或は上野（うへの）に據（よ）る。若し公をして耐忍（たいにん）の力無く、共に怒（いか）つて事を擧げしめば、則ち府下悉く焦土（せうど）と爲らん。假令（たとひ）都を遷すも、其の盛大を極（きは）むること今日の如きは實に難からん。然らば則ち公常人の忍（しの）ぶ能はざる所を忍ぶ、其功亦多し。舊（きう）藩士日高誠實（ひだかせいじつ）時に句あり云ふ。

「功烈（こうれつ）尤も多かりしは前内府（ぜんないふ）。至尊（しそん）直に鶴城（かくじやう）の中に在り」と。

一五　聖人安レ死。賢人分レ死。常人恐レ死。

〔譯〕聖人は死を安（やす）んず。賢人は死を分（ぶん）とす。常人は死を恐（おそ）る。

一六　賢者臨レ※［＃「歹＋勿」、33-1］、見二理當一レ然、以爲レ分、恥レ畏レ死、而希レ安レ死、故神氣不レ亂。又有二遺訓一、足二以聳一レ聽。而其不レ及二聖人一亦在二於此一。聖人平生言動無二一非一レ訓。而臨レ※［＃「歹＋勿」、33-3］、未二必爲二遺訓一。視二死生一眞如二晝夜一、無レ所レ著レ念。

〔譯〕賢者は※（ぼつ）［＃「歹＋勿」、33-4］するに臨（のぞ）み、理（り）の當（まさ）に然るべきを見て、以て分（ぶん）と爲し、死を畏（おそ）るゝを恥（は）ぢて、死を安（やす）んずるを希（こひねが）ふ、故に神氣（しんき）亂（みだ）れず。又遺訓（いくん）あり、以て聽（ちやう）を聳（そびや）かすに足る。而かも其の聖人に及ばざるも亦此に在り。聖人は平生の言動（げんどう）一として訓に非ざるは無し。而て※［＃「歹＋勿」、33-6］するに臨（のぞ）みて、未だ必しも遺訓を爲（つく）らず。死生（しせい）を視（み）ること眞に晝夜（ちうや）の如し、念（ねん）を著（つ）くる所無し。

〔評〕十年の役（えき）、私學校の徒（と）、彈藥製造所（だんやくせいざうじよ）を掠（かす）む。南洲時に兎を大隈（おほすみ）山中に逐（お）ふ。之を聞いて猝（にはか）に色（いろ）を變（か）へて曰ふ、誤（しま）つたと。爾後（じご）肥後日向に轉戰して、神色夷然（いぜん）たり。

一七　堯舜文王、其所レ遺典謨訓誥、皆可二以爲二萬世法一。何遺命如レ之。至二於成王顧命、曾子善言一、賢人分上自當レ如レ此已。因疑孔子泰山之歌、後人假託爲レ之。檀弓※(「匚＜口」、第4水準2-3-67)レ信、多二此類一。欲レ尊二聖人一、而却爲二之累一。

〔譯〕堯舜（げうしゆん）文王は、其の遺（のこ）す所の典謨（てんぼ）訓誥（くんかう）、皆以て萬世の法と爲す可し。何の遺命（いめい）か之に如（し）かん。成（せい）王の顧命（こめい）、曾（そう）子の善言に至つては、賢人の分（ぶん）上自（おのづか）ら當（まさ）に此の如くなるべきのみ。因つて疑（うたが）ふ、孔子泰山（たいざん）の歌、後人假託（かたく）之を爲（つく）れるならん。檀弓（だんぐう）の信じ※(「匚＜口」、第4水準2-3-67)（がた）きこと此の類多し。聖人を尊ばんと欲して、却（かへ）つて之が累（るゐ）を爲せり。

一八　一部歷史、皆傳二形迹一、而情實或不レ傳。讀レ史者、須レ要下就二形迹一以討中出情實上。

〔譯〕一部（ぶ）の歷史（れきし）、皆形迹（けいせき）を傳（つた）へて、情實（じやうじつ）或は傳らず。史を讀む者は、須らく形迹に就（つ）いて以て情實を討（たづ）ね出だすことを要すべし。

一九　博聞強記、聰明横也。精義入レ神、聰明竪也。

〔譯〕博聞強記（はくぶんきやうき）は、聰明（そうめい）の横（よこ）なり。精義（せいぎ）神に入るは、聰明（そうめい）の竪（たて）なり。

二〇　生物皆畏レ死。人其靈也、當下從二畏レ死之中一、揀中出不レ畏レ死之理上。吾思、我身天物也。死生之權在レ天、當レ順二受之一。我之生也、自然而生、生時未二嘗知一レ喜矣。則我之死也、應二亦自然而死、死時未二嘗知一レ悲也。天生レ之而天死レ之、一聽二于天一而已、吾何畏焉。吾性即天也。軀殼則藏レ天之室也。精氣之爲レ物也、天寓二於此室一。遊魂之爲レ變也、天離二於此

室一。死之後即生之前、生之前即死之後。而吾性之所二以爲一レ性者、恒在二於死生之外一、吾何畏焉。夫晝夜一理、幽明一理。原レ始反レ終、知二死生之理一、何其易簡而明白也。吾人當下以二此理一自省上焉。

〔譯〕生物は皆死を畏（おそ）る。人は其靈（れい）なり、當に死を畏るゝの中より死を畏れざるの理を揀出（けんしゆつ）すべし。吾れ思ふ、我が身は天物なり。死生の權（けん）は天に在り、當に之を順受（じゆんじゆ）すべし。我れの生るゝや自然にして生る、生るゝ時未だ嘗て喜（よろこ）ぶことを知らず。則ち我の死するや應（まさ）に亦自然にして死し、死する時未だ嘗て悲むことを知らざるべし。天之を生みて、天之を死（ころ）す、一に天に聽（まか）さんのみ、吾れ何ぞ畏れん。吾が性は即ち天なり、躯殼（くかく）は則ち天を藏（おさ）むるの室なり。精氣（せいき）の物と爲るや、天此の室に寓（ぐう）す。遊魂（いうこん）の變（へん）を爲すや、天此の室を離（はな）る。死の後は即ち生の前なり、生の前は即ち死の後なり。而て吾が性の性たる所以は、恒（つね）に死生の外に在り、吾れ何ぞ畏れん。夫れ晝夜は一理（り）なり、幽明（いうめい）は一理なり。始めを原（たづ）ねて終（をは）りに反（かへ）らば、死生の理を知る、何ぞ其の易簡（いかん）にして明白なるや。吾人は當に此の理を以て自省（じせう）すべし。

二一　畏レ死者生後之情也、有二躯殼一而後有二是情一。不レ畏レ死者生前之性也、離二躯殼一而始見二是性一。人須レ自二得不レ畏レ死之理於畏レ死之中一、庶二乎復一レ性焉。

〔譯〕死を畏るゝは生後の情なり、躯殼（くかく）有つて後に是（こ）の情あり。死を畏れざるは生前の性なり、躯殼（くかく）を離（はな）れて始て是の性を見る。人は須（すべか）らく死を畏れざるの理を死を畏るゝの中に自得（じとく）すべし、性に復（かへ）るに庶（ちか）し。

〔評〕幕府勤王の士を逮（とら）ふ。南洲及び伊地知正治（いぢちまさはる）、海江田武治（かいえだたけはる）等尤も其の指目（しもく）する所となる。僧月照（げつせう）嘗て近衛公の密命（みつめい）を喞（ふく）みて水戸に至る、幕吏之を索（もと）むること急なり。南洲其の免れざることを知り相共に鹿兒島に奔（はし）る。一日南洲、月照の宅を訪（と）ふ。此の夜月色清輝（せいき）なり。預（あらかじ）め酒饌（しゆせん）を具（そな）へ、舟を薩海に泛（うか）ぶ、南洲及び平野次郎一僕と從ふ。月照船頭に立ち、和歌を朗吟して南洲に示す、南洲首肯（しゆかう）する所あるものゝ如し、遂に相擁（よう）して海に投（とう）ず。次郎等水聲起るを聞いて、倉皇（さうくわう）として之を救ふ。月照既に死して、南洲は蘇（よみがへ）ることを得たり。南洲は終身（しゆうしん）月照と死せざりしを憾（うら）みたりと云ふ。

二二　誘掖而導レ之、教之常也。警戒而喩レ之、教之時也。躬行以率レ之、教之本也。不レ言而化レ之、教之神也。抑而揚レ之、激而進レ之、教之權而變也。教亦多レ術矣。

〔譯〕誘掖（いうえき）して之を導（みちび）くは、教の常なり。警戒（けいかい）して之を喩（さと）すは、教の時なり。躬（み）に行うて之を率（ひ）きゐるは、教の本なり。言はずして之を化するは、教の神（しん）なり。抑（おさ）へて之を揚（あ）げ、激（げき）して之を進（すゝ）ましむるは、教の權（けん）にして而て變（へん）なり。教も亦術（じゆつ）多し。

二三　閑想客感、由二志之不一レ立。一志既立、百邪退聽。譬二之清泉湧出、旁水不一レ得二渾入一。

〔譯〕閑想（かんさう）客感（きやくかん）は、志の立たざるに由る。一志既に立てば、百邪退き聽（き）く。之を清泉（せいせん）湧出（ようしゆつ）せば、旁水（ばうすゐ）渾入（こんにふ）することを得ざるに譬（たと）ふべし。

〔評〕政府郡縣（ぐんけん）の治（ち）を復（ふく）せんと欲す、木戸公と南洲と尤も之を主張す。或ひと南洲を見て之を説く、南洲曰く諾（だく）すと。其人又之を説く、南洲曰く、吉之助の一諾、死以て之を守ると、他語（たご）を交（まじ）へず。

二四　心爲レ靈。其條理動二於情識一、謂二之欲一。欲有二公私一、情識之通二於條理一爲レ公。條理之滯二於情識一爲レ私。自辨二其通滯一者、即便心之靈。

〔譯〕心を靈（れい）と爲す。其の條理（でうり）の情識（じやうしき）に動（うご）く、之を欲（よく）と謂ふ。欲に公私（こうし）有り、情識の條理に通ずるを公と爲す。條理の情識に滯（とゞこほ）るを私と爲す。自ら其の通（つう）と滯（たい）とを辨（べん）ずるは、即ち心の靈（れい）なり。

二五　人一生所レ遭、有二險阻一、有二坦夷一、有二安流一、有二驚瀾一。是氣數自然、竟不レ能レ免、即易理也。人宜二居而安、玩而樂一焉。若趨二避之一、非二達者之見一。

〔譯〕人一生遭（あ）ふ所、險阻（けんそ）有り、坦夷（たんい）有り、安流（あんりう）有り、驚瀾（きやうらん）有り。是れ氣數（きすう）の自然にして、竟（つひ）に免（まぬが）るゝ能はず、即ち易理（えきり）なり。人宜しく居つて安んじ、玩（もてあそ）んで樂（たの）しむべし。若し之を趨避（すうひ）せば、達（たつ）者の見に非ず。

〔評〕或ひと岩倉公幕を佐くと讒（ざん）す。公薙髪（ていはつ）して岩倉邸に蟄居（ちつきよ）す。大橋愼藏（しんざう）、香（か）川敬（けい）三、玉松操（みさを）、北島秀朝（ひでとも）等、公の志を知り、深く結納（けつなふ）す。南洲及び大久保公、木戸公、後藤象次郎、坂本龍馬等公を洛東より迎へて、朝政に任ぜしむ。公既に職に在り、屢（しば／＼）刺客（せきかく）の狙擊（そげき）する所となり、危難（きなん）累（しき）りに至る、而かも毫（がう）も趨避（すうひ）せず。

二六　心之官則思。思字只是工夫字。思則愈精明、愈篤實。自二其篤實一謂二之行一、自二其精明一謂二之知一。知行歸二於一思字一。

〔譯〕心の官（かん）は則ち思ふ。思の字只是れ工夫（くふう）の字なり。思へば則ち愈精明（せいめい）なり、愈篤實（とくじつ）なり。其の篤實より之を行と謂ひ、其の精明より之を知と謂ふ。知と行とは一の思の字に歸（き）す。

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録::秋月 種樹::ブルースカイブックス

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

秋月 種樹

二七　處レ晦者能見レ顯。據レ顯者不レ見レ晦。

〔譯〕晦（くわい）に處（を）る者は能く顯（けん）を見る。顯に據（よ）る者は晦を見ず。

二八　取二信於人一難也。人不レ信二於口一、而信二於躬一。不レ信二於躬一、而信二於心一。是以難。

〔譯〕信（しん）を人に取るは難し。人は口を信ぜずして躬（み）を信ず。躬を信ぜずして心を信ず。是を以て難し。

〔評〕南洲守庭吏（しゆていり）と爲る。島津齊彬（なりあきら）公其の眼光（がんくわう）烱々（けい／＼）として人を射（い）るを見て凡（ぼん）人に非ずと以爲（おも）ひ、拔擢（ばつてき）して之を用ふ。公嘗（かつ）て書を作（つく）り、南洲に命じて之を水戸（みと）の烈（れつ）公に致さしめ、初めより封緘（ふうかん）を加へず。烈公の答書（たふしよ）も亦然り。

二九　臨時之信、累二功於平日一。平日之信、收二効於臨時一。

〔譯〕臨時（りんじ）の信（しん）は、功（こう）を平日に累（かさ）ぬればなり。平日の信は、効（こう）を臨時に收（をさ）むべし。

〔評〕南洲官軍の先鋒（せんぱう）となり、品川に抵（いた）る、勝安房（かつあは）、大久保一翁、山岡鐵太郎之を見て、慶喜罪（つみ）を俟（ま）つの狀（じやう）を具陳（ぐちん）し、討伐（たうばつ）を弛（ゆる）べんことを請ふ。安房素より南洲を知れり、之を説くこと甚だ力む。乃ち令を諸軍に傳へて、攻擊を止（とゞ）む。

三〇　信孚二於上下一、天下無二甚難レ處事一。

〔譯〕信上下に孚（ふ）す、天下甚だ處（しよ）し難き事無し。

三一　意之誠否、須下於二夢寐中事一驗上レ之。

〔譯〕意（い）の誠否（せいひ）は、須らく夢寐（むび）中（ちゆう）の事に於て之を驗（けん）すべし。

〔評〕南洲弱冠（じやくくわん）の時、藤田東湖（ふじたとうこ）に謁（えつ）す、東湖は重瞳子（ちやうどうし）、躯幹（くかん）魁傑（くわいけつ）にして、黄麻（わうま）の外套（ぐわいとう）を被（き）、朱室（しゆざや）の長劒（ちやうけん）を佩（さ）して南洲を邀（むか）ふ。南洲一見して瞿然（くぜん）たり。乃ち室内に入る、一大白を屬（ぞく）して酒（さけ）を侑（すゝ）めらる。南洲は素（も）と飲（いん）を解（かい）せず、強（し）ひて之を盡（つく）す、忽（たちま）ち酩酊（めいてい）して嘔吐（おうど）席（せき）を汚（けが）す。東湖は南洲の朴率（ぼくそつ）にして飾（かざ）るところなきを見て酷（はなは）だ之を愛（あい）す。嘗て曰ふ、他日我が志を繼（つ）ぐ者は獨此の少年子のみと。南洲も亦曰ふ、天下眞（しん）に畏（おそ）る

可き者なし、唯（たゞ）畏る可き者は東湖一人のみと。二子の言、夢寐（むび）相感（かん）ずる者か。

三二　不レ起二妄念一是敬。妄念不レ起是誠。

〔譯〕妄念（ばうねん）を起さゞるは是れ敬（けい）なり。妄念起らざるは是れ誠（まこと）なり。

三三　因二民義一以激レ之、因二民欲一以趨レ之、則民忘二其生一而致二其死一。是可二以一戰一。

〔譯〕民の義（ぎ）に因つて以て之を激（げき）し、民の欲（よく）に因つて以て之を趨（はし）らさば、則ち民其の生を忘（わす）れて其の死を致（いた）さん。是れ以て一戰（せん）す可し。

〔評〕兵數は孰（いづ）れか衆（おほ）き、器械（きかい）は孰れか精（せい）なる、糧食（りやうしよく）は孰れか積（つ）める、この數者を以て之を較（くら）べば、薩長（さつちやう）の兵は固より幕府に及ばざるなり。然り而して伏見（ふしみ）の一戰、東兵披靡（ひび）するものは何ぞや。南洲及び木戸公等の※（さく）［＃「竹かんむり／束」、41-8］、民の欲（よく）に因つて之を趨（はし）らしたればなり。是を以て破竹（はちく）の勢（いきほひ）ありたり。

三四　漸必成レ事、惠必懷レ人。如二歴代姦雄一、有下竊二其祕一者上、一時亦能遂レ志。可レ畏之至。

〔譯〕漸（ぜん）は必ず事を成（な）し、惠（けい）は必ず人を懷（な）づく。歴代（れきだい）姦雄（かんゆう）の如き、其祕（ひ）を竊（ぬす）む者有り、一時亦能く志を遂（と）ぐ。畏る可きの至りなり。

三五　匿情似二愼密一。柔媚似二恭順一。剛愎似二自信一。故君子惡二似而非者一。

〔譯〕匿情（とくじやう）は愼密（しんみつ）に似（に）る。柔媚（じうび）は恭順（きようじゆん）に似る。剛愎（がうふく）は自信（じしん）に似る。故に君子は似（に）て非（ひ）なる者を惡（にく）む。

三六　事レ君不レ忠非レ孝也、戰陳無レ勇非レ孝也。曾子孝子、其言如レ此。彼謂二忠孝不二兩全一者、世俗之見也。

〔譯〕君に事（つか）へて忠ならざるは孝に非ざるなり、戰陳（せんじん）に勇（ゆう）無きは孝に非ざるなりと。曾子（そうし）は孝子なり、其の言此（かく）の如し。彼の忠孝兩全（りやうぜん）せずと謂ふは、世俗（せぞく）の見なり。

〔評〕十年の難（なん）、賊の精鋭（せいえい）熊本城下に聚（あつま）る。而て援軍（えんぐん）未だ達せず。谷中將死を以て之を守り、少しも動かず。賊勢（ぞくせい）遂に屈し、其兵を東する能はず。昔者（むかし）加藤嘉明（よしあき）言へるあり。曰ふ、將（しやう）を斬（き）り旗（はた）を搴（と）るは、氣盛なる者之を能くす、而かも眞勇（しんゆう）に非ざるなり。孤城（こじやう）を援（えん）なきに守り、孱（せん）主を衆※(「目＋癸」、第4水準2-82-11)（そむ）くに保（たも）つ、律義者（りちぎもの）に非ざれば能はず、故に眞勇は必ず律義者（りちぎもの）に出づと。尾藤孝肇（びと

うかうてう）曰ふ、律義（りちぎ）とは蓋（けだ）し直（ちよく）にして信あるを謂ふと。余謂ふ、孤城を援（えん）なきに守るは、谷中將の如くば可なりと。嗚呼中將は忠且つ勇なり、而して孝其の中（うち）に在り。

三七　不レ可レ誣者人情、不レ可レ欺者天理、人皆知レ之。蓋知而未レ知。

〔譯〕誣（し）ふ可らざる者は人情なり、欺（あざむ）く可らざる者は天理なり、人皆之を知る。蓋（けだ）し知つて而して未だ知らず。

〔評〕榎本武揚（えのもとぶやう）等五稜郭（りようかく）の兵已に敗る。海律全書（かいりつぜんしよ）二卷を以て我が海軍に贈（おく）つて云ふ、是れ嘗て荷蘭（おらんだ）に學んで獲（え）たる所なり、身と俱に滅（ほろ）ぶることを惜しむと。武揚の誣ふ可らざるの情天聽（てんちやう）に達（たつ）し、其の死を宥し寵用（ちようよう）せらる、天理なり。

三八　知是行之主宰、乾道也。行是知之流行、坤道也。合以成二體躯一。則知行、是二而一、一而二。

〔譯〕知（ち）は是れ行（かう）の主宰（しゆさい）なり、乾道（けんだう）なり。行は是れ知の流行（りうかう）なり、坤道（こんだう）なり。合して以て體躯（たいく）を成す。則ち知行は是れ二にして一、一にして二なり。

三九　學貴二自得一。人徒以レ目讀二有字之書一、故局二於字一、不レ得二通透一。當三以レ心讀二無字之書一、乃洞而有二自得一。

〔譯〕學（がく）は自得（じとく）を貴（たふと）ぶ。人徒（いたづら）に目を以て有字の書を讀む、故に字に局（きよく）し、通透（つうとう）することを得ず。當（まさ）に心を以て無字の書を讀むべし、乃ち洞（とう）して自得するところ有らん。

四〇　孟子以二讀書一爲二尚友一。故讀二經籍一、即是聽二嚴師父兄之訓一也。讀二史子一、亦即與二明君賢相英雄豪傑一相周旋也。其可レ不下清二明其心一以對中越之上乎。

〔譯〕孟子讀書を以て尚友（しやういう）と爲す。故に經籍（けいせき）を讀む、即ち是れ嚴師（げんし）父兄の訓を聽くなり。史子（しゝ）を讀む、亦即ち明君賢相英雄豪傑と相周旋（しうせん）するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對越（たいえつ）せざる可けんや。

四一　爲レ學緊要、在二心一字一。把レ心以治レ心、謂二之聖學一。爲レ政著眼、在二情一字一。循レ情以治レ情、謂二之王道一。王道聖學非レ二。

〔譯〕學を爲すの緊要（きんえう）は心の一字に在り。心を把（と）つて以て心を治む、之を聖學と謂ふ。政を爲すの着眼（ちやくがん）は情の一字に在り。情に循（したが）うて以て情を治む、之を王道と謂ふ。王道と聖學と二に非ず。

〔評〕兵を治（ち）して對抗（たいかう）し、互に勝敗（しようはい）あり。兵士或は負傷（ふしやう）者の状（じやう）を爲す、醫（い）故に之を診察（しんさつ）す。兵士初め負傷者とならんことを惡む。一日、聖上（せいじやう）親臨（しんりん）して負傷者を撫（ぶ）し、恩言（おんげん）を賜（たま）ふ、此より兵士負傷者とならんことを願ふ

。是に由つて之を觀れば、兵を馭（ぎよ）するも亦情に外ならざるなり。

四二　發レ憤忘レ食、志氣如レ是。樂以忘レ憂、心體如レ是。不レ知二老之將一レ至、知レ命樂レ天如レ是。聖人與レ人不レ同、又與レ人不レ異。

〔譯〕憤（いきどほり）を發して食を忘（わす）る、志氣（しき）是（かく）の如し。樂（たのし）んで以て憂（うれひ）を忘る、心體（しんたい）是の如し。老（らう）の將に至らんとするを知らず、命（めい）を知り天を樂しむもの是（かく）の如し。聖人は人と同じからず、又人と異（こと）ならず。

四三　講二説聖賢一、而不レ能レ躬レ之、謂二之口頭聖賢一、吾聞レ之一※(「りっしんべん＋易」、第3水準1-84-53)然。論二辯道學一、而不レ能レ體レ之、謂二之紙上道學一、吾聞レ之再※(「りっしんべん＋易」、第3水準1-84-53)然。

〔譯〕聖賢を講説（かうせつ）して之を躬（み）にする能はず、之を口頭（こうとう）聖賢と謂ふ、吾れ之を聞いて一たび※(「りっしんべん＋易」、第3水準1-84-53)然（てきぜん）たり。道學を論辯（ろんべん）して之を體（たい）する能はず、之を紙上道學と謂ふ、吾れ之を聞いて再び※(「りっしんべん＋易」、第3水準1-84-53)然（てきぜん）たり。

四四　學、稽二之古訓一、問、質二之師友一、人皆知レ之。學必學二之躬一、問必問二諸心一、其有二幾人一耶。

〔譯〕學（がく）之を古訓（こくん）に稽（かんが）へ、問（もん）之を師友に質（たゞ）すは、人皆之を知る。學必ず之を躬に學び、問必ず諸を心に問ふは、其れ幾人有らんか。

四五　以レ天而得者固。以レ人而得者脆。

〔譯〕天を以て得たるものは固（かた）し。人を以て得たるものは脆（もろ）し。

四六　君子自慊、小人自欺。君子自彊、小人自棄。上達下達、落二在一自字一。

〔譯〕君子は自ら慊（こゝろよ）くし、小人は自ら欺（あざむ）く。君子は自ら彊（つと）め、小人は自ら棄（す）つ。上達（たつ）と下達（たつ）とは、一の自（じ）の字に落在（らくざい）す。

四七　人皆知レ問二身之安否一、而不レ知レ問二心之安否一。宜下自問中能不レ欺二闇室一否、能不レ愧二衾影一否、能得二安穩快樂一否上。時時如レ是、心便不レ放。

〔譯〕人は皆身の安否（あんぴ）を問（と）ふことを知つて、而かも心の安否を問ふことを知らず。宜しく自ら能く闇室（あんしつ）を欺（あざむ）かざるや否（いな）や、能く衾影（きんえい）に愧（は）ぢざるや否や、能く安穩（あんおん）快樂（くわいらく）を得るや否やと問ふべし。時時是（かく）の如くば心便（すなは）ち放（はな）たず。

〔評〕某士南洲に面（めん）して仕官（しくわん）を求（もと）む。南洲曰ふ、汝俸給（ほうきふ）幾許（いくばく）を求むるやと。某曰ふ、三十圓ばかりと。南洲乃ち三十圓を與へて曰ふ、汝に一月（ひとつき）の俸（ほう）金を與へん、汝は宜しく汝の心に向（む

か）うて我が才力（さいりき）如何を問ふべしと。其人復（ま）た來らず。

四八　無レ爲而有レ爲之謂レ誠。有レ爲而無レ爲之謂レ敬。

〔譯〕爲す無くして爲す有る之を誠（まこと）と謂ふ。爲す有つて爲す無し之を敬（けい）と謂ふ。

四九　寛懐不レ忤二俗情一、和也。立脚不レ墜二俗情一、介也。

〔譯〕寛懐（かんくわい）俗情（ぞくじやう）に忤（さか）はざるは、和（わ）なり。立脚（りつきやく）俗情に墜（お）ちざるは、介（かい）なり。

五〇　惻隱之心偏、民或有二溺レ愛殞レ身者一。羞惡之心偏、民或有下自二經溝涜一者上。辭讓之心偏、民或有二奔亡風狂者一。是非之心偏、民或有二兄弟鬩レ牆父子相訟者一。凡情之偏、雖二四端一遂陷二不善一。故學以致二中和一、歸三於無二過不及一、謂二之復性之學一。

〔譯〕惻隱（そくいん）の心偏（へん）すれば、民或は愛（あい）に溺（おぼ）れ身を殞（おと）す者有り。羞惡（しうを）の心偏すれば、民或は溝涜（かうとく）に自經（じけい）する者有り。辭讓（じじやう）の心偏すれば、民或は奔亡（ほんばう）風狂（ふうきやう）する者有り。是非の心偏すれば、民或は兄弟牆（かき）に鬩（せめ）ぎ父子相訟（うつた）ふ者有り。凡そ情の偏するや、四端（たん）と雖遂に不善（ふぜん）に陷（おちい）る。故に學んで以て中和を致（いた）し、過不及（かふきふ）無きに歸（き）す、之を復性（ふくせい）の學と謂ふ。

〔評〕江藤新平（しんぺい）、前原一誠（いつせい）等の如きは、皆維新（いしん）の功臣として、勤王二なく、官は參議（さんぎ）に至り、位は人臣の榮（えい）を極（きは）む。然り而して前後皆亂を爲し誅に伏す、惜しいかな。豈四端（たん）の偏（へん）ありしものか。

五一　此學吾人一生負擔、當二斃而後已一。道固無レ窮、堯舜之上善無レ盡。孔子自レ志レ學、至二七十一、每二十年一、自覺二其有一レ所レ進、孜孜自彊、不レ知二老之將一レ至。假使二其踰レ耄至一レ期、則其神明不レ測、想當レ爲二何如一哉。凡學二孔子一者、宜下以二孔子之志一爲上レ志。

〔譯〕此の學は吾人一生の負擔（ふたん）、當（まさ）に斃（たふ）れて後に已（や）むべし。道固より窮り無し。堯舜の上、善盡くること無し。孔子學に志してより七十に至るまで、十年毎に自ら其の進（すゝ）む所有るを覺（さと）り、孜孜（しゝ）として自ら彊（つと）めて、老（らう）の將に至らんとするを知らず。假（も）し其をして耄（ばう）を踰（こ）え期（き）に至らしめば、則ち其の神明測（はか）られざること、想（おも）ふに當に何如たるべきぞや。凡そ孔子を學ぶ者は、宜しく孔子の志を以て志と爲すべし。

五二　自彊不レ息、天道也、君子所レ以也。如下虞舜孳孳爲レ善、大禹思二日孜孜一、成湯苟日新、文王不二遑暇一、周公坐以待レ旦、孔子發レ憤忘上レ食、皆是也。彼徒事二靜養瞑坐一而已、則與二此學脈一背馳。

〔譯〕自ら彊（つと）めて息（や）まざるは天道なり、君子の以（もち）ゐる所なり。虞

舜（ぐしゆん）の孳孳（じじ）として善を爲し、大禹（う）の日に孜孜せんことを思ひ、成湯（せいたう）の苟（まこと）に日に新にせる、文王の遑（いとま）あき暇（いとま）あらざる、周（しう）公の坐（ざ）して以て旦（たん）を待（ま）つ、孔子の憤（いきどほ）りを發して食を忘るゝ如きは、皆是なり。彼の徒（いたづら）に靜養（せいやう）瞑坐（めいざ）を事とすのみならば、則ち此の學脈（がくみやく）と背馳（はいち）す。

五三　自彊不レ息時候、心地光光明明、有二何妄念游思一、有二何嬰累※(「罘」の「不」に代えて「圭」、第4水準2-84-77)想一。

〔譯〕自ら彊（つと）めて息（や）まざる時候（じこう）は、心地（しんち）光光明明（くわう／＼めい／＼）にして、何の妄念（ばうねん）游思（ゆうし）有らん、何の嬰累（えいるゐ）※(「罘」の「不」に代えて「圭」、第4水準2-84-77)想（けさう）有らん。

〔評〕三條公の筑前に在る、或る人其の旅況（りよきやう）の無聊（むれう）を察（さつ）して美女を進む、公之を卻（しりぞ）く。某氏宴（えん）を開（ひら）いて女樂（がく）を設（まう）く、公怫（ふつ）然として去れり。

五四　提二一燈一、行二暗夜一。勿レ憂二暗夜一、只頼二一燈一。

〔譯〕一燈（とう）を提（ひつさ）げて、暗夜（あんや）を行く。暗夜を憂（うれ）ふる勿れ、只だ一燈（とう）を頼（たの）め。

〔評〕伏水（ふしみ）戰を開き、砲聲（はうせい）大内（おほうち）に聞え、愈激（はげ）しく愈近（ちか）づく。岩倉公南洲に問うて曰ふ、勝敗（しようはい）何如と。南洲答へて曰ふ、西郷隆盛在り、憂ふる勿れと。

五五　倫理物理、同一理也。我學二倫理之學一、宜二近取二諸身一、即是物理。

〔譯〕倫理（りんり）と物理とは同一理なり。我れ倫理の學を學ぶ、宜しく近く諸（これ）を身に取るべし、即ち是れ物理なり。

五六　濁水亦水也。一澄則爲二清水一。客氣亦氣也。一轉則爲二正氣一。逐レ客工夫、只是克レ己、只是復レ禮。

〔譯〕濁水（だくすゐ）も亦水なり、一澄（ちよう）すれば則ち清水（せいすゐ）となる。客氣（きやくき）も亦氣なり、一轉（てん）すれば則ち正氣（せいき）となる。客（きやく）を逐（お）ふの工夫は、只是れ己に克つなり、只是れ禮に復（かへ）るなり。

〔評〕南洲壯時（さうじ）角觝（かくてい）を好み、毎（つね）に壯士と角す。人之を苦（くる）しむ。其守庭吏（しゆていり）と爲るや、庭（てい）中に土豚（どとん）を設（まう）けて、掃除（さうぢよ）を事（こと）とせず。既にして慨然（がいぜん）として天下を以て自ら任（にん）じ、節（せつ）を屈（くつ）して書を讀み、遂に復古（ふくこ）の大業（げふ）を成せり。

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録::秋月 種樹::ブルースカイブックス

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

秋月 種樹

五七　理本無レ形。無レ形則無レ名矣。形而後有レ名。既有レ名、則理謂二之氣一無二不可一。故專指二本體一、則形後亦謂二之理一。專指二運用一、則形前亦謂二之氣一、竝無二不可一。如二浩然之氣一、專指二運用一、其實太極之呼吸、只是一誠。謂二之氣原一、即是理。

〔譯〕理は本（も）と形（かたち）無し。形無ければ則ち名無し。形ありて後に名有り。既に名有れば、則ち理之を氣と謂ふも、不可無し。故に專ら本體（ほんたい）を指せば、則ち形後（けいご）も亦之を理と謂ふ。專ら運用（うんよう）を指せば、則ち形前も亦之を氣と謂ふ、竝（ならび）に不可無し。浩然（かうぜん）の氣の如きは、專ら運用を指すも、其の實太極（たいきよく）の呼吸（こきふ）にして、只是れ一誠（せい）なり。之を氣原（げん）と謂ふ、即ち是れ理なり。

五八　物我一體、即是仁。我執二公情一以行二公事一、天下無レ不レ服。治亂之機、在二於公不公一。周子曰、公二於己一者、公二於人一。伊川又以二公理一、釋二仁字一。餘姚亦更二博愛一爲二公愛一。可二并攷一。

〔譯〕物我（ぶつが）一體（たい）は即ち是れ仁なり。我れ公情（こうじやう）を執（と）つて以て公事を行ふ、天下服せざる無し。治亂（ちらん）の機（き）は公と不公とに在り。周（しう）子曰ふ、己（おのれ）に公なる者は人に公なりと。伊川（いせん）又公理（こうり）を以て仁の字を釋（しやく）す。餘姚（よえう）も亦博愛を更（あらた）めて公愛と爲せり。并（あは）せ攷（かんが）ふ可し。

〔評〕余嘗て木戸公の言を記せり。曰ふ、會津藩士（あひづはんし）は、性直にして用ふ可し、長人（ちやうじん）の及ぶ所に非ざるなりと。夫れ會（くわい）は長（ちやう）の敵（てき）なり、而（し）かも其の言此（かく）の如し。以て公の事を處（しよ）すること皆公平（こうへい）なるを知るべし。

五九　尊二德性一、是以道二問學一、即是尊二德性一。先立二其大者一、則其知也眞。能迪二其知一、則其功也實。畢竟一條路往來耳。

〔譯〕德性を尊ぶ、是を以て問學（ぶんがく）に道（よ）る、即ち是れ德性を尊ぶなり。先づ其の大なる者を立つれば、則ち其知や眞（しん）なり。能く其の知を迪（ふ）めば、則ち其功や實（じつ）なり。畢竟（ひつきやう）一條（いちでう）路（ろ）の往來のみ。

六〇　周子主レ靜、謂二心守二本體一。※［＃「圖」の「回」に代えて「面から一、二画目をとったもの」、52-8］説自二註無レ欲故靜一、程伯氏因レ此有二天理人欲之説一。叔子持レ敬工夫亦在レ此。朱陸以下雖二各有二得レ力處一、而畢竟不レ出二此範圍一。不レ意至二明儒一、朱陸分レ黨如二敵讐一。何以然邪。今之學者、宜下以二平心一待上レ之。取二其得レ力處一可也。

〔譯〕周子（しうし）靜（せい）を主（しゆ）とす、心（こゝろ）本體（ほんたい）を守るを謂ふなり。※説（づせつ）［#「圖」の「回」に代えて「面から一、二画目をとったもの」、52-12］に、「欲（よく）無し故に靜（せい）」と自註（じちゆう）す、程伯氏（ていはくし）此（これ）に因つて天理（り）人欲（よく）の説（せつ）有り。叔子（しゆくし）敬（けい）を持（ぢ）する工夫（くふう）も亦此（こゝ）に在り。朱陸（しゆりく）以下各力（ちから）を得る處有りと雖、而（し）かも畢竟（ひつきやう）此の範圍（はんい）を出でず。意（おも）はざりき明儒（みんじゆ）に至つて、朱陸（しゆりく）黨（たう）を分つこと敵讐（てきしう）の如くあらんとは。何を以て然るや。今の學ぶ者、宜しく平心を以て之を待つべし。其の力を得る處を取らば可なり。

六一　象山、宇宙内事、皆己分内事、此謂二男子擔當之志如一レ此。陳※(「さんずい＋晧」の「日」に代えて「白」、第3水準1-87-18)引レ此註二射義一、極是。

〔譯〕象山（しようざん）の、宇宙（うちう）内（ない）の事は皆己（おの）れ分内（ぶんない）の事は、此（こ）れ男子擔當（たんたう）の志此（かく）の如きを謂ふなり。陳※(「さんずい＋晧」の「日」に代えて「白」、第3水準1-87-18)（ちんかう）此を引いて射義（しやぎ）を註（ちゆう）す、極（きは）めて是（ぜ）なり。

〔評〕南洲嘗（かつ）て東湖に從うて學ぶ。當時（たうじ）書する所、今猶民間に存（そん）す。曰ふ、「一寸（いつすん）の英心（えいしん）萬夫（ばんぷ）に敵（てき）す」と。蓋（けだ）し復古（ふくこ）の業（げふ）を以て擔當（たんたう）することを爲す。維新（いしん）征東の功（こう）實に此に讖（しん）す。末路（まつろ）再（ふたゝ）び讖（しん）を成せるは、悲（かな）しむべきかな。

六二　講二論語一、是慈父教レ子意思。講二孟子一、是伯兄誨レ季意思。講二大學一、如二網在一レ綱。講二中庸一、如二雲出一レ岫。

〔譯〕論語（ろんご）を講（かう）ず、是れ慈父（じふ）の子を教ふる意思（いし）。孟子（まうし）を講ず、是れ伯兄の季（き）を誨（をし）ふる意思（いし）。大學（だいがく）を講ず、網（あみ）の綱（かう）に在る如し。中庸（ちゆうよう）を講ず、雲（くも）の岫（しう）を出づる如し。

六三　易是性字註脚。詩是情字註脚。書是心字註脚。

〔譯〕易（えき）は是れ性（せい）の字の註脚（ちゆうきやく）なり。詩（し）は是れ情の字の註脚なり。書（しよ）は是れ心の字の註脚なり。

六四　獨得之見似レ私、人驚二其驟至一。平凡之議似レ公、世安二其狃聞一。凡聽二人言一、宜二虛懷而邀一レ之。勿レ苟二安狃聞一可也。

〔譯〕獨得（どくとく）の見（けん）は私（わたくし）に似る、人其の驟至（しうし）に驚（おどろ）く。平凡（へいぼん）の議（ぎ）は公に似る、世其の狃聞（ぢうぶん）に安んず。凡そ人の言を聽（き）くは、宜しく虛懷（きよくわい）にして之を邀（むか）ふべし。狃聞（ぢうぶん）に苟安（こうあん）することなくんば可なり。

六五　心理是豎工夫、博覽是横工夫。豎工夫、則深入自得。横工夫、則淺易汎濫。

〔譯〕心理（しんり）は是れ竪（たて）の工夫なり、博覧（はくらん）は是れ横（よこ）の工夫なり。竪（たて）の工夫は、則ち深入（しんにふ）自得（じとく）せよ。横（よこ）の工夫は、則ち淺易（せんい）汎濫（はんらん）なれ。

六六　讀レ經、宜下以二我之心一讀二經之心一、以二經之心一釋中我之心上。不レ然徒爾講二明訓詁一而已、便是終身不二曾讀一。

〔譯〕經（けい）を讀むは、宜しく我れの心を以て經の心を讀み、經の心を以て我の心を釋（しやく）すべし。然らずして徒爾（とじ）に訓詁（くんこ）を講明（かうめい）するのみならば、便（すなは）ち是れ終身曾（かつ）て讀まざるなり。

六七　引レ滿中レ度、發無二空箭一。人事宜二如レ射然一。

〔譯〕滿（まん）を引（ひ）き度（ど）に中（あた）り、發して空箭（くうぜん）無し。人事宜しく射（しや）の如く然るべし。

六八　前人、謂二英氣害一レ事。余則謂、英氣不レ可レ無、但露二圭角一爲二不可一。

〔譯〕前人は、英氣（えいき）は事を害（がい）すと謂へり。余は則ち謂ふ、英氣は無かる可らず、但（た）だ圭角（けいかく）を露（あら）はすを不可と爲すと。

六九　刀槊之技、懷二怯心一者衄、賴二勇氣一者敗。必也泯二勇怯於一靜一、忘二勝負於一動一。動レ之以レ天、廓然太公、靜レ之以レ地、物來順應。如レ是者勝矣。心學亦不レ外二於此一。

〔譯〕刀槊（たうさく）の技（ぎ）、怯（きよ）心を懷（いだ）く者は衄（くじ）け、勇氣（ゆうき）を賴（たの）む者は敗（やぶ）る。必や勇怯（ゆうきよ）を一靜（せい）に泯（ほろぼ）し、勝負（しようぶ）を一動（どう）に忘（わす）れ、之を動（うご）かすに天を以てして、廓然（かくぜん）太公（たいこう）に、之を靜（しづ）むるに地を以てして、物（もの）來つて順應（じゆんおう）せん。是（かく）の如き者は勝（か）たん。心學も亦此（こゝ）に外ならず。

〔評〕長兵京師に敗（やぶ）る。木戸公は岡部氏に寄（よ）つて禍（わざはい）を免（まぬか）るゝことを得たり。後（のち）丹波に赴（おもむ）き、姓名（せいめい）を變（か）へ、博徒（ばくと）に混（まじ）り、酒客（しゆかく）に交（まじは）り、以て時勢を窺（うかゞ）へり。南洲は浪華（なには）の某樓に寓（ぐう）す。幕吏搜索（さうさく）して樓下に至る。南洲乃ち劇（げき）を觀るに託して、舟を※(「にんべん＋就」、第3水準1-14-40)（か）りて逃（に）げ去れり。此れ皆勇怯（ゆうきよ）を泯（ほろぼ）し勝負（しようぶ）を忘るゝものなり。

七〇　無レ我則不レ獲二其身一、即是義。無レ物則不レ見二其人一、即是勇。

〔譯〕我（わ）れ無ければ則ち其身を獲（え）ず、即ち是れ義（ぎ）なり。物無ければ則ち其人を見ず、即ち是れ勇（ゆう）なり。

七一　自反而縮者、無レ我也。雖二千萬人一吾往矣、無レ物也。

〔譯〕自ら反（かへり）みて縮（なほ）きは、我（われ）無きなり。千萬人と雖吾れ往かんは、物無きなり。

七二　三軍不レ和、難二以言一レ戰。百官不レ和、難二以言一レ治。書云、同レ寅協レ恭和衷哉。唯一和字、一二串治亂一。

〔譯〕三軍和せずば、以て戰（たゝかひ）を言ひ難（がた）し。百官和せずば、以て治（ち）を言ひ難し。書に云ふ、寅（いん）を同じうし恭（きよう）を協（あは）せ和衷（わちゆう）せよやと。唯だ一の和字、治亂（ちらん）を一串（いつくわん）す。

〔評〕復古（ふくこ）の業（げふ）は薩長（さつちやう）の合縱（がつしよう）に成る。是れより先き、土人坂本龍馬（りゆうま）、薩長の和せざるを憂（うれ）へ、薩邸（てい）に抵（いた）り、大久保・西郷諸氏に説き、又長邸に抵（いた）り、木戸・大村諸氏に説く。薩人黒田・大山諸氏長に至り、長人木戸・品川諸氏薩に往（ゆ）き、而て後和（わ）成り、維新（いしん）の鴻業（こうげふ）を致（いた）せり。

七三　凡事有二眞是非一、有二假是非一。假是非、謂二通俗之所二可否一。年少未レ學、而先了二假是非一、※(「二点しんにょう＋台」、第3水準1-92-53)レ後欲レ得二眞是非一、亦不レ易レ入。所レ謂先入爲レ主、不レ可二如何一耳。

〔譯〕凡そ事に眞是非（しんぜひ）有り、假是非（かぜひ）有り。假是非とは、通俗（つうぞく）の可否する所を謂ふ。年少（わか）く未だ學ばずして、先づ假是非を了（れう）し、後に※(「二点しんにょう＋台」、第3水準1-92-53)（およ）んで眞是非を得んと欲するも、亦入り易（やす）からず。謂はゆる先入（せんにふ）主（しゆ）と爲（な）り、如何ともす可らざるのみ。

七四　果斷、有二自レ義來者一。有二自レ智來者一。有二自レ勇來者一。有下并二義與一レ智而來者上、上也。徒勇而已者殆矣。

〔譯〕果斷（くわだん）は、義（ぎ）より來るもの有り。智（ち）より來るもの有り。勇（ゆう）より來るもの有り。義と智とを併（あは）せて來るもの有り、上（じやう）なり。徒（たゞ）に勇（ゆう）のみなるは殆（あやふ）し。

〔評〕關八州（くわんはつしう）は古より武を用ふるの地と稱す。興世（おきよ）王反逆（はんぎやく）すと雖、猶將門（まさかど）に説いて之に據（よ）らしむ。小田原の役（えき）、豐（ほう）公は徳川公に謂うて曰ふ、東方に地あり、江戸（えど）と曰ふ、以て都府（とふ）を開く可しと。一新（いつしん）の始（はじ）め、大久保公遷都（せんと）の議（ぎ）を獻（けん）じて曰ふ、官軍已に勝（か）つと雖、東賊（とうぞく）猶未だ滅（ほろ）びず、宜しく非常（ひじやう）の斷（だん）を以て非常の事を行ふべしと。先見の明智（ち）と謂ふ可し。

七五　公私在レ事、又在レ情。事公而情私者有レ之。事私而情公者有レ之。爲レ政者、宜下權二衡人情事理輕重處一、以用中其中於上レ民。

〔譯〕公私（こうし）は事に在り、又情に在り。事公にして情私なるもの之有り。事私にして情公なるもの之有り。政を爲す者は、宜しく人情事理（じり）輕重（けいぢゆう）の處を權衡（けんかう）して、以て其の中（ちゆう）を民に用ふべし。

〔評〕南洲城山に據（よ）る。官軍柵（さく）を植（う）ゑて之を守る。山縣（やまがた）中將書を南洲に寄せて兩軍殺傷（さつしやう）の慘（さん）を極言（きよくげん）す

。南洲其の書を見て曰ふ、我れ山縣に負（そむ）かずと、斷然（だんぜん）死に就（つ）けり。中將は南洲の元（げん）を視（み）て曰ふ、惜（を）しいかな、天下の一勇將を失へりと、流涕（りうてい）すること之を久しうせり。噫（あゝ）公私情盡せり。

七六　愼獨工夫、當下如二身在一稠人廣座中一一般上。應酬工夫、當下如一間居獨處時一一般上。

〔譯〕愼獨（しんどく）の工夫（くふう）は、當（まさ）に身稠人（ちうじん）廣座（くわうざ）の中に在るが如く一般（ぱん）なるべし。應酬（おうしう）の工夫は、當（まさ）に間居（かんきよ）獨處（どくしよ）の時の如く一般なるべし。

七七　心要二現在一。事未レ來、不レ可レ邀。事已往、不レ可レ追。纔追纔邀、便是放心。

〔譯〕心は現在（げんざい）せんことを要（えう）す。事未だ來らずば、邀（むか）ふ可らず。事已に往（ゆ）かば、追（お）ふ可らず。纔（わづ）かに追ひ纔かに邀へば、便（すなは）ち是れ放心（はうしん）なり。

七八　物集二於其所一レ好、人也。事赴二於所一レ不レ期、天也。

〔譯〕物（もの）其の好む所に集（あつま）るは、人なり。事（こと）期（き）せざる所に赴（おもむ）くは、天なり。

七九　人貴二厚重一、不レ貴二遲重一。尚二眞率一、不レ尚二輕率一。

〔譯〕人は、厚重（こうちよう）を貴ぶ、遲重（ちちよう）を貴ばず。眞率（しんそつ）を尚（たつと）ぶ、輕率（けいそつ）を尚ばず。

〔評〕南洲人に接（せつ）して、妄（みだり）に語（ご）を交（まじ）へず、人之を憚（はゞか）る。然れども其の人を知るに及んでは、則ち心を傾（かたむ）けて之を援（たす）く。其人に非ざれば則ち終身（しゆうしん）言（い）はず。

八〇　凡生物皆資二於養一。天生而地養レ之。人則地之氣精英。吾欲二靜坐以養レ氣、動行以養レ體、氣體相資、以養二此生一。所二以從レ地而事一レ天。

〔譯〕凡そ生物は皆養（やう）を資（と）る。天生じて地之を養（やしな）ふ。人は則ち地の氣の精英（せいえい）なり。吾れ靜坐して以て氣を養ひ、動行（どうかう）して以て體を養ひ、氣と體と相資（と）つて以て此の生を養はんと欲す。地に從うて天に事ふる所以なり。

〔評〕維新の業（げふ）は三藩の兵力に由ると雖、抑之を養ふに素（そ）あり、曰く名義（めいぎ）なり、曰く名分（めいぶん）なり。或は云ふ、維新の功（こう）は大日本史（だいにつぽんし）及び外史に基（もと）づくと、亦理（り）無（な）しとせざるなり。

八一　凡爲レ學之初、必立下欲レ爲二大人一之志上、然後書可レ讀也。不レ然、徒貪二聞見一而已、則或恐二長レ傲飾一レ非。所レ謂假二寇兵一、資二盜糧一也、可レ虞。

〔譯〕凡そ學を爲すの初め、必ず大人たらんと欲するの志を立て、然る後書讀む可し。然らずして、徒（いたづら）に聞見を貪（むさぼ）るのみならば、則ち或は傲（がう）を長（ちや

う）じ非を飾（かざ）らんことを恐る。謂はゆる寇（こう）に兵を假（か）し、盜（たう）に糧（りやう）を資（し）するなり、虞（おもんぱか）る可し。

八二　以二眞己一克二假己一、天理也。以二身我一害二心我一、人欲也。

〔譯〕眞己（しんこ）を以て假己（かこ）に克（か）つ、天理なり。身我（しんが）を以て心我を害（がい）す、人欲（じんよく）なり。

八三　無二一息間斷一、無二一刻急忙一。即是天地氣象。

〔譯〕一息（そく）の間斷（かんだん）無く、一刻（こく）の急忙（きふばう）無し。即ち是れ天地の氣象（きしやう）なり。

〔評〕木戸公毎旦考妣（ちゝはゝ）の木主を拜す。身煩劇（はんげき）に居ると雖、少しくも怠（おこた）らず。三十年の間一日の如し。

八四　有レ心二於無一レ心、工夫是也。無レ心二於有一レ心、本體是也。

〔譯〕心無きに心有るは、工夫（くふう）是なり。心有るに心無きは、本體（ほんたい）是なり。

八五　不レ知而知者、道心也。知而不レ知者、人心也。

〔譯〕知らずして知る者は、道心（だうしん）なり。知つて知らざる者は、人心（じんしん）なり。

八六　心靜、方能知二白日一。眼明、始會レ識二青天一。此程伯氏之句也。青天白日、常在二於我一。宜下掲二之座右一、以爲中警戒上。

〔譯〕心靜（しづか）にして、方（まさ）に能く白日を知る。眼明かにして、始めて青天を識り會（え）すと。此れ程伯氏（ていはくし）の句なり。青天白日は、常に我に在り。宜しく之を座右（ざいう）に掲（かゝ）げて、以て警戒（けいかい）と爲すべし。

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録::秋月 種樹::ブルースカイブックス

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

秋月 種樹

八七　靈光充レ體時、細大事物、無二遺落一、無二遲疑一。

〔譯〕靈光（れいくわう）體（たい）に充（み）つる時、細大（さいだい）の事物、遺落（ゐらく）無く、遲疑（ちぎ）無し。

〔評〕死を決するは、薩（さつ）の長ずる所なり。公義を説くは、土の俗（ぞく）なり。維新（いしん）の初め、一公卿あり、南洲の所に往いて復古（ふくこ）の事を説く。南洲曰ふ、夫れ復古は易事（いじ）に非ず、且つ九重阻絶（そぜつ）し、妄（みだり）に藩人を通ずるを得ず、必ずや縉紳（しんしん）死を致す有らば、則ち事或は成らんと。又後藤象（ごとうしやう）次郎に往（ゆ）いて之を説く。象次郎曰ふ、復古は難（かた）きに非ず、然れども門地（もんち）を廢（はい）し、門閥（もんばつ）を罷（や）め、賢（けん）を擧（あ）ぐること方（はう）なきに非ざれば、則ち不可なりと。二人の本領自ら見（あら）はる。

八八　人心之靈、如二太陽一然。但克伐怨欲、雲霧四塞、此靈烏在。故誠レ意工夫、莫レ先下於掃二雲霧一仰中白日上。凡爲レ學之要、自レ此而起レ基。故曰、誠者物之終始。

〔譯〕人心の靈（れい）、太陽（たいやう）の如く然り。但だ克伐（こくばつ）怨欲（えんよく）、雲霧（うんむ）四塞（しそく）せば、此の靈（れい）烏（いづ）くに在る。故に意を誠（まこと）にする工夫は、雲霧（うんむ）を掃（はら）うて白日を仰（あふ）ぐより先きなるは莫（な）し。凡そ學を爲すの要（えう）は、此（これ）よりして基（もとゐ）を起（おこ）す。故に曰ふ、誠は物の終始（しゆうし）と。

八九　胸次清快、則人事百艱亦不レ阻。

〔譯〕胸次（きようじ）清快（せいくわい）なれば、則ち人事百艱（かん）亦阻（そ）せず。

九〇　人心之靈、主二於氣一。氣體之充也。凡爲レ事、以レ氣爲二先導一、則擧體無二失措一。技能工藝、亦皆如レ此。

〔譯〕人心の靈（れい）は、氣（き）を主（しゆ）とす。氣は體（たい）に之れ充（み）つるものなり。凡そ事を爲すに、氣を以て先導（せんだう）と爲さば、則ち擧體（きよたい）失措（しつそ）無し。技能（ぎのう）工藝（こうげい）も、亦皆此（かく）の如し。

九一　靈光無二障碍一、則氣乃流動不レ餒、四體覺レ輕。

〔譯〕靈光（れいくわう）障碍（しやうげ）無くば、則ち氣（き）乃ち流動（りうどう）して餒（う）ゑず、四體（したい）輕（かる）きを覺（おぼ）えん。

九二　英氣是天地精英之氣。聖人蘊二之於内一、不三肯露二諸外一。賢者則時時露レ之。自餘豪傑

之士、全然露レ之。若下夫絶無二此氣一者上、爲二鄙夫小人一、碌碌不レ足レ算者爾。

〔譯〕英氣は是れ天地精英（せいえい）の氣なり。聖人は之を内に蘊（をさ）めて、肯（あへ）て諸（これ）を外に露（あら）はさず。賢者は則ち時時之を露（あら）はす。自餘（じよ）豪傑の士は、全然之を露（あら）はす。夫（か）の絶（た）えて此（この）氣（き）なき者の若きは、鄙夫（ひふ）小人と爲す、碌碌（ろく／＼）として算（かぞ）ふるに足らざるもののみ。

九三　人須レ著二忙裏占レ間、苦中存レ樂工夫一。

〔譯〕人は須らく忙裏（ばうり）に間（かん）を占（し）め、苦中（くちゆう）に樂（らく）を存ずる工夫を著（つ）くべし。

〔評〕南洲岩崎谷洞中に居る。砲丸雨の如く、洞口を出づる能はず。詩あり云ふ「百戰無レ功半歳間、首邱幸得レ返二家山一。笑儂向レ死如二仙客一。盡日洞中棋響間」（編者曰、此詩、長州ノ人杉孫七郎ノ作ナリ、南洲翁ノ作ト稱スルハ誤ル）謂はゆる忙（ばう）中に間を占むる者なり。然れども亦以て其の戰志無きを知るべし。余句あり、云ふ「可レ見南洲無二戰志一。砲丸雨裡間牽レ犬」と、是れ實録（じつろく）なり。

九四　凡區二處人事一、當下先慮二其結局處一、而後下上レ手。無レ楫之舟勿レ行、無レ的之箭勿レ發。

〔譯〕凡そ人事を區處（くしよ）するには、當さに先づ其の結局（けつきよく）の處を慮（おもんぱ）かりて、後に手を下すべし。楫（かぢ）無きの舟は行（や）る勿（なか）れ、的（まと）無きの箭（や）は發（はな）つ勿れ。

九五　朝而不レ食、則晝而饑。少而不レ學、則壯而惑。饑者猶可レ忍、惑者不レ可二奈何一。

〔譯〕朝（あさ）にして食（くら）はずば、晝（ひる）にして饑（う）う。少（わか）うして學ばずば、壯にして惑（まど）ふ。饑うるは猶忍（しの）ぶ可し、惑（まど）ふは奈何ともす可からず。

九六　今日之貧賤不レ能二素行一、乃他日之富貴、必驕泰。今日之富貴不レ能二素行一、乃他日之患難、必狼狽。

〔譯〕今日の貧賤（ひんせん）に素行（そかう）する能はずば、乃ち他日の富貴（ふうき）に、必ず驕泰（けうたい）ならん。今日の富貴（ふうき）に素行（そかう）する能はずんば、乃ち他日の患難（くわんなん）に、必ず狼狽（らうばい）せん。

〔評〕南洲、顯職（けんしよく）に居り勳功（くんこう）を負（お）ふと雖、身極めて質素（しつそ）なり。朝廷賜（たま）ふ所の賞典（しやうてん）二千石は、悉（こと／″＼）く私學校の費（ひ）に充（あ）つ。貧困（ひんこん）なる者あれば、囊（のう）を傾（かたぶ）けて之を賑（すく）ふ。其の自ら視ること※然（かんぜん）［＃「陷のつくり＋欠」、65-6］として、微賤（びせん）の時の如し。

九七　雅事多是虚、勿下謂二之雅一而耽上レ之。俗事却是實、勿下謂二之俗一而忽上レ之。

〔譯〕雅事（がじ）多くは是れ虚（きよ）なり、之を雅（が）と謂うて之に耽（ふけ）ること勿れ。俗事却て是れ實なり、之を俗と謂うて之を忽（ゆるがせ）にすること勿れ。

九八　歴代帝王、除二唐虞一外、無二眞禪讓一。商周已下、秦漢至二於今一、凡二十二史、皆以レ武開レ國、以レ文治レ之。因知、武猶レ質、文則其毛彩、虎豹犬羊之所二以分一也。今之文士、其可レ忘二武事一乎。

〔譯〕歴代（れきだい）の帝王、唐虞（たうぐ）を除（のぞ）く外、眞の禪讓（ぜんじやう）なし。商周（しやうしう）已下（いか）秦漢（しんかん）より今に至るまで、凡そ二十二史、皆武を以て國を開き、文を以て之を治む。因つて知る、武は猶質（しつ）のごとく、文は則ち其の毛彩（まうさい）にして、虎豹（こへう）犬羊の分るゝ所以なるを。今の文士、其れ武事を忘る可けんや。

九九　遠方試レ歩者、往往舍二正路一、※［＃「走にょう＋多」、66-3］二捷徑一、或繆入二林※［＃「くさかんむり／奔」、66-3］一、可レ嗤也。人事多類レ此。特記レ之。

〔譯〕遠方（えんぱう）に歩を試（こゝろ）むる者、往往にして正路（せいろ）を舍（すて）て、捷徑（せうけい）に※（はし）［＃「走にょう＋多」、66-5］り、或は繆（あやま）つて林※（りんまう）［＃「くさかんむり／奔」、66-5］に入る、嗤（わら）ふ可きなり。人事多く此に類（るゐ）す。特（とく）に之を記（しる）す。

一〇〇　智仁勇、人皆謂二大徳難一レ企。然凡爲二邑宰一者、固爲二親民之職一。其察二奸慝一、矜二孤寡一、折二強梗一、即是三徳實事。宜下能就二實迹一以試レ之可上也。

〔譯〕智仁勇は、人皆大徳（たいとく）企（くはだ）て難しと謂ふ。然れども凡そ邑宰（いふさい）たる者は、固と親民（しんみん）の職（しよく）たり。其の奸慝（かんとく）を察し、孤寡（こくわ）を矜（あはれ）み、強梗（きやうかう）を折（くじ）くは、即ち是れ三徳の實事なり。宜しく能く實迹に就いて以て之を試（こゝろ）みて可なるべし。

一〇一　身有二老少一、而心無二老少一。氣有二老少一、而理無二老少一。須丙能執下無二老少一之心上、以體乙無二老少一之理甲。

〔譯〕身に老少（らうせう）有りて、心に老少無し。氣に老少有りて、理に老少無し。須らく能く老少無きの心を執（と）つて、以て老少無きの理を體（たい）すべし。

〔評〕幕府（ばくふ）南洲に禍（わざはひ）せんと欲す。藩侯（はんこう）之を患（うれ）へ、南洲を大島（おほしま）に竄（ざん）す。南洲貶竄（へんざん）せらるゝこと前後數年なり、而て身益壯（さかん）に、氣益旺（さかん）に、讀書是より大に進むと云ふ。

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録::秋月 種樹::ブルースカイブックス

南洲手抄言志録 03 南洲手抄言志録

秋月 種樹

底本：「西郷南洲遺訓」岩波文庫、岩波書店
　　1939（昭和14）年2月2日第1刷発行
　　1985（昭和60）年2月20日第26刷発行
底本の親本：「南洲手抄言志録」博聞社
　　1888（明治21）年5月17日発行
初出：「南洲手抄言志録」博聞社
　　1888（明治21）年5月17日発行
※「「褒」の「保」に代えて「丑」」は「デザイン差」と見て「衰」で入力しました。
※底本の末尾に添えられた「書後の辭」で、秋月種樹氏が漢文の評言を附したとある。
入力：田中哲郎
校正：川山隆
2008年7月14日作成
2009年9月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について
このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。
［＃…］は、入力者による注を表す記号です。
「くの字点」は「／＼」で、「濁点付きくの字点」は「／″＼」で表しました。
「くの字点」をのぞくJIS X 0213にある文字は、画像化して埋め込みました。
この作品には、JIS X 0213にない、以下の文字が用いられています。（数字は、底本中の出現「ページ-行」数。）これらの文字は本文内では「※［＃…］」の形で示しました。

「歹＋勿」	33-1、33-3、33-4、33-6
「竹かんむり／束」	41-8
「圖」の「回」に代えて「面から一、二画目をとったもの」	52-8、52-12
「陷のつくり＋欠」	65-6
「走にょう＋多」	66-3、66-5
「くさかんむり／奔」	66-3、66-5